

【要旨】西谷啓治とドストエフスキー —— 西田の解釈を踏まえながら

太田裕信（愛媛大学）

西田の宗教哲学の本質的継承者として名高い西谷啓治（1900-1990）の哲学の根本問題は「ニヒリズムを通してのニヒリズムの超克」（「私の哲学的発足点」1963年）にあった。

しかし、そもそも（西谷にとって）「ニヒリズム」とは何を意味するのだろうか？

それを考えるに第一に参照されるべき著作は、やはり『ニヒリズム』（1949年初版）であろう。西谷のニヒリズム論は、当初の全体的な計画では「ニーチェとドストエフスキーと仏教との三つの重点を置いて」書かれる予定であった（『ニヒリズム』「緒言」）。しかし予想外にニーチェを中心とした西欧哲学のニヒリズム論の分量が多くなり、それだけで『ニヒリズム』は出版された。そのため再び全体的計画は練り直され、ドストエフスキー論は、独立して3分冊として出版される予定になった。しかし、この計画も挫折し、1冊目だけが初版『ニヒリズム』と同じく1949年に『ロシアの虚無主義』として出版され、残りの2冊は書かれなかった。なお、これは1972年に増補版『ニヒリズム』の付録として収められることになった。さらに「仏教とニヒリズム」というテーマは、独立して論じられることはなくなり、主著『宗教とは何か』（1960年）に受け継がれていると推測される。

西谷の考えでは、西洋において「ニヒリズム」を最も徹底的に考えたうえで「ニヒリズムを通してのニヒリズムの超克」を試みたのがニーチェとドストエフスキーである。しかし両者の「超克」の仕方は異なり、前者は「超人」への道、後者は「神」への道を目指すものであったとされる（『ニヒリズム』「緒言」）。また、日本人がそれらのヨーロッパのニヒリズムを学ぶことは、近代日本特有の「生ける自己矛盾」（ヨーロッパという他を「無批判」に受け取り「自己を忘れ、自己を失った」こと、すなわち「自他の統一性」がないこと、その結果「自己嫌悪」に至っていること）という「精神的空洞」を「自覚」せしめ、「仏教」という「伝統された精神的高貴」を「新しく」「担う」道を開くと言う（『ニヒリズム』七章「我々にとってのニヒリズムの意義」）。ここに西谷特有の「ニヒリズムを通してのニヒリズムの超克」の内実が浮かび上がるはずである。それゆえ、西谷のニヒリズム論、ひいては西谷哲学の全貌を正しく理解するには、ニーチェ、ドストエフスキー、仏教がどのように結びついて解釈されているかが、問われなければならない。

管見では、ニーチェや仏教をめぐる西谷の解釈はいくらか研究論文があるが、ドストエフスキー解釈についてはまったくない。本発表ではその西谷のドストエフスキー解釈について考えてみたい。ただし本発表では、より主題を限定する。ドストエフスキーの小説には大きく分けて、一方で強烈な「ニヒリストたち」が、他方で「大地」というロシアの自然や民族に根ざした精神、またキリスト教的な「愛」の精神に貫かれた人物たちが登場するのだが、後者については取り扱わず、前者の「ニヒリストたち」をめぐる西谷の解釈（それは「同情」「誠実」といったニーチェの諸概念を道具として遂行されている）を、『ロシアの虚無主義』とその他の文献などから可能なかぎり復元してみたい。その他の文献とは、唐木順三、高坂正顕、森有正、和辻哲郎との対談集『ドストエフスキーの哲学』（1967年）、「大審問官について」（1968年）などである。つまりドストエフスキーの「ニヒリズム」の西谷の解釈に焦点を当て、その「超克」をめぐる西谷の解釈については扱わない。このように主題を限定しても、その主題の全貌の解明は、2本程度の論文の分量になってしまうのではないかと予測されるため、本発表はその基本を論じるにとどまるだろう。

ところで、西田と西谷が共通して好んだ文学者の最たる者がドストエフスキーである。西田と西谷のドストエフスキー解釈の差異も簡単に考えてみたい。ドストエフスキーの小説は、私たちの想像力を刺激し現代にも通じる具体的なイメージをもって「ニヒリズム」の本質を教えてくれるが、それをめぐる西谷の解釈は、彼の哲学の本質的理解に益すると思われるのである。（2024/06/19）